成果報告

古都・長安学　2014年度特別講演会

吉田　愛

本特集は，2015年1月16日に行われた学習院大学国際研究教育機構特別講演会の報告である。本講演会では，文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアの歴史都市と自然環境―先端科学が拓く「古都・長安学」」（代表：鶴間和幸・文学部教授）で中国・韓国から招聘した3名の新進気鋭の研究者に，下記の題目でお話しいただいた。

南廷昊氏（韓国・慶北大学校師範大学附設高等学校教師）

「百済武王の王妃と義慈王の生母についての考察」

任小波氏（中国・復旦大学中国歴史地理研究所専任講師）

「763年吐蕃による長安陥落の再検討」

聶順新氏（中国・陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究院助理研究員）

「国忌行香制度における唐代長安の寺観」

慶北大学校・復旦大学・陝西師範大学の3校はそれぞれ学習院大学と関係が深く，これまでも，日本学術振興会・アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」（2005年～2010年），日本学術振興会・頭脳循環を加速化する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「リモートセンシングデータを利用した黄河流域の歴史と環境」（2010年～2012年）を活用して研究者を定期的に招聘・派遣したり，共同で調査・シンポジウムを行ったりするなどの交流を続けてきた。本講演会はそうした長年の交流の延長線上のものである。

南氏は朝鮮古代史を専門とし，百済最後の王，義慈王の時代の政局に関する論文を多数発表している。任氏は，敦煌文書等に遺されたチベット文字史料を読み解いて漢文史料と対照させ，チベットの歴史地理の研究，蔵訳仏典の整理を精力的に行っている。聶氏の研究分野は歴史文化地理・唐代仏教制度史で，官寺の地位の変遷や分布について研究を重ねている。三者三様，専門分野が異なるものの，本講演会の報告では研究対象とする時代が7～9世紀と揃い，長安をモデルケースとして東アジアにおける古代都市の建設と環境との関係を探求する「古都・長安学」のプロジェクトに相応しい内容となった。

（よしだ　あい　　学習院大学国際研究教育機構PD共同研究員）